



War Cry

1月号

福音版

2026

January

No.2899

二〇二六年 一月一日発行

明治二十八年創刊

福音版・毎月一日発行 広報版・奇数月十五日発行

# ハレが満ちる正月 ——キリストと囲む祝膳<sup>いわいげん</sup>

山谷 真



日本では正月になると、多くの人が家族のもとに帰り、新しい年を祝います。この習慣には、「年神<sup>としがみ</sup>」を迎えるという伝統的な考え方があり、家の入口に門松<sup>かどまつ</sup>を置き、お祝いの食事を共にすること、家族に力と祝福がもたらされると信じられてきました。

その背景には、古くから「新しい命を迎える」という思いがありました。これは、日本人に深く根づいた「喜びの時」の象徴です。お節料理<sup>せちりょう</sup>を食べるために使う「祝箸<sup>いわいばし</sup>」は、両端が使えるようになっていますが、これは片方が人間、片方が神という神人共食<sup>じんじんきょうしょく</sup>の概念を表していると言われています。

構造主義<sup>かうぞうしぎ</sup>的に見ると、正月は「日常」と「特別」が交わる瞬間です。普段は分かれていた世界が、この時だけ重なり、人々の心に新しい力があふれます。正月の行事は、単なる年中行事ではなく、ハレ—命が満ちる時—として経験されてきたのです。それは、私たちが普段忘れがちな深い安心感を呼び覚まします。

実は聖書の世界にも、それと似た構造があります。イエス・キリストは全人類の罪を身代わりに引き受け

て十字架<sup>ごうか</sup>上で死に、ヨミに降り、復活によって死を命へと変えてくださいました（ヨミからかえるヨミがえり）。絶望から希望へ、死から命へという「反転<sup>はんてん</sup>」が起る時、そこには新しい力と喜びがあふれ出します。

このキリストの出来事は、正月に込められた「新しい力が訪れる」という感覚と重なって見えます。私たちの元へ来て祝福を与える「訪れ<sup>みとぞり</sup>」という構造は、古代の日本人が正月に感じたものと似た形を取っています。ただし、聖書においては、訪れるのは「一人の神の御霊<sup>みたま</sup>」である聖霊です。聖霊は、私たちを導く愛そのものであり、神の愛が聖霊を通して私たちの心に注がれるのです。

そのように考えると、正月は家族の集まりを大切にしつつ、同時に「キリストが共にいてくださる」時として受け取ることができるのです。ヨハネの黙示録三章二〇節にあるように、キリストは戸をたたき、あなたと共に食事することを願っておられます。

「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、

わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう。」

もし、あなたがキリストに対して心の扉を開くなら、正月の食卓は、キリストが祝福を注いでくださる「ハレの日」となるのです。それこそが、本当の「ハレルヤ<sup>ハレルヤ</sup>」でしょう（ハレルヤとは聖書の原語であるヘブライ語で「神をほめたたえよ」という意味です）。

新しい一年を迎える時、キリストは疲れた心を満たし、もう一度歩み出す力を与えてくださいます。日本の正月が昔から人々を励ましてきたように、復活のキリストもまた、私たちが新しく、喜びの中へ引き入れてくださいます。その招きに応える時、心の中に静かな平安が広がっていきます。

今年の初め、ぜひキリストと共に歩む喜びを新たにしていきたいと思います。

（救世軍士官（伝道者））

\*1 祭りや儀礼で神に供えた食物を人も共に食べることで、神と人が同じ食卓を囲む象徴的行為を指す。

\*2 文化人類学で発展した立場で、人間の文化・神話・習慣が働くと考えられる。表面的に異なる現象に共通パターンを見いだし、人間理解を深める方法。



# 神様の導きに生かされて

白石 京子 さん  
(救世軍横浜小隊所属)



救世軍の小隊(教会にあたる)には年齢も人生経験も様々な人が集い、礼拝と互いの交流を楽しんでいます。横浜市南区にある救世軍横浜小隊に通う白石さん。地域での福祉活動に長く携わってこられた、その歩みの背景にある神様の導きをお聞きしました。

## 生い立ち／救世軍の中で育った幼少期

私の両親は救世軍の士官(伝道者)です。私は七人兄弟の末っ子として一九四八

年に生まれました。父が東京の救世軍麻布小隊(教会にあたる)に任命されていたとき、戦後の焼け野原にバラックを建てて集会を始めました。それは、住

居と礼拝の場所を兼ねた本当に小さな建物でした。

私の誕生日は日曜日でした。朝から集会がある日で、父は「神様は私たちの願いを聞いてくださる」と確信し、小学生の兄と姉に「きょうは赤ちゃんが生まれる」と告げました。母は陣痛の中でがんばり、聖別会(礼拝)が終わって夜の救霊会(伝道集会)の最中、信者さんが集って集会がおこなわれている隣の部屋で私を産みました。私は、父が説教をしている本当に隣で生まれたのです。

戦後でしたから、お産婆さんが来て自宅での出産でした。その様子を兄弟も覚えていて、何十回も聞かされました。父は「神様は何でも聞いてくださるから大丈夫だ」と確信していたそうで、本当に守られて無事に生まれたのだと言っていました。

父母の転任と共に、麻布から杉並、そして清瀬へと移りました。清瀬にいた時期が最も長く、九年ほどでした。年長になる頃から中学二年まで、救世軍清瀬病院の敷地の中に住み、遊び場は、炊事場隣の砂場や大

きな石炭置き場、洗濯場の物干し台など、敷地のあちこちでした。怪我をしても家に戻らず病院へ行き、看護師さんに手当てをしてもらってから帰るようなこともありました。多くの人に見守られ、何をしていても皆が見ていてくれる、温かい環境の中で育まりました。



私が生まれた麻布小隊の部屋。この写真は家庭団(女性の集い)例会、1950年3月2日。



青少年部書記官フィリップス中佐を迎えての清瀬小隊青少年部集会

## 結婚と子育ての時代

学校を終えて生命保険会社に就職し、そこで夫と出会って結婚しました。翌年子どもが生まれ、生後一カ月の時、夫に辞令が出て、新潟へ六年間移り住みました。

学生時代から救世軍の日曜学校や聖別会に毎週通っていましたが、外に出ると「うちはどこか普通と違う」と感じ、逃げたい思いもあった。救世軍から足が遠のきました。六年の新潟を経て、横浜の夫の実家に入り、義父母と同居しました。子どもも小さく、どこにも知り合いのいない土地でしたが、子

どもを育てるには地域のつながりが必要だと考え、子ども会などに参加して、地域活動に取り組みました。

## 試練の時期

昭和から平成に変わる頃、夫が単身赴任中に胃がんのステージ3と診断され、横浜で手術を受けることになりました。その手術の当日、義父が四十度の熱で救急搬送され、私は二つの病院を行き来する日々となりました。半年後、義父は亡くなりました。

しばらくして姉の体調が悪化し、末期がんで余命三カ月と告げられましたが、本人が告知を受ける前に、

## 父との大切な時間

その三カ月後に母も召天しました。脳梗塞で入院して四日目のことでした。夫の手術から二年の間に、三人の家族が亡くなりました。懸命にやってはいましたが、心に空洞が生まれたように思います。

母の召天の一年後、今度は父が倒れました。父は救世軍の引退士官住宅で一人暮らしを始めていましたので、兄妹で日替わりで支えることになりました。私も





1965年ごろの両親 宮本重兵衛・マサ

週二回ほど通い、炊事・掃除・洗濯をして、父と一緒に昼食をとりました。

食事の後、父は「きょうはこの話」と自ら決め、生

い立ちや麻布時代、救世軍のことなどを語りました。

父は長野県松代の農家の十人兄弟の十番目でした。長

兄は信仰に導かれ、救世軍士官となるために士官学校

(神学校に相当)に入校しましたが、結核で天に召され

ました。当時八歳ほどだった父は、最も尊敬する兄か

ら「酒は飲むな」「信仰をもて」と聞かされて、その頃

からすでに士官になると心に決めていたそうです。

そのような父の話を、私は毎週相づちを打ちながら聞き、あとから思えば、そのことで私の内に信仰の

下地がつくられたように思います。父と語り合い、一緒

に祈る、それを繰り返す日々でした。

## 救世軍への帰還

やがて父は脳梗塞で倒れ、救世軍ブース記念病院に入院し、さらに、特養に移りました。病床での父の言葉

や、見舞いに来られる救世軍の方々の祈りが、私の心に深く入ってきました。

ある日、ブース病院の駐車場で救世軍の全国大会のチラシを目にし、「行こうか、どうしようか」と迷い

ました。大会の日はずいぶん長男は「行つたほうがいいよ。きょう行かなかつたら後悔するよ。誕生日はまた来るから」と背中を押してくれました。

会場に着くと、一つだけ空いていた席に案内され、隣を見ると、私の子ども時代

に日曜学校で教えてくださった坂本明子少佐が座つておられました。二十数年ぶりの再会でした。その日の集会で坂本少佐と一緒に

「恵の座」(説教壇の前に設けられた、ひざまずいて祈る場所)でお祈りをしたとき、心がストンと落ちるように静

まりました。

その翌週から私は救世軍横浜小隊へ通い始めました。二十年の後、「ここにまた来なさい」と神様から導かれたのです。

## 地域での働き

救世軍に戻った後、不思議なことに地域でも働きが開かれました。民生委員の中に子どもに関わる主任児童委員制度が新設され、お

声がけいただきました。横浜小隊に来てから二年後のことでした。

制度は始まったばかりで前例がなく、児童問題、特に虐待などに携わりました。一人ではできないので、皆

さんと連携して一つ一つ関わりました。子どもとお母さんが安心して過ごせる環境をつくりたいと思い、他

の民生委員と協力して「子どものサロン」を立ち上げました。

最初は喫茶店の空き店舗を借り、カレーをつくって親子に食べてもらい、実家に帰ったようにホッとできる空間を目指しました。やが

て子どもたちから「カレーのおばちゃん」と呼ばれるようになりました。この働きは後継者によって二十年

以上続けられていて、今も月二回、二十五〜三十組ほどの親子が集まっています。また、不登校の子どもたちのフリースペースを設け

ました。並んで一緒にご飯をつくりながら会話が生まれる時間を大切にしました。

始める時、「三年がんばろう。だめならやめよう」と仲間と決めましたが、これも二十数年、発展しながら

続いています。

その後、介護相談員を市から委嘱され、十年ほど務めました。老健・特養を月一回ずつ二人一組で回り、

利用者や職員の皆さんと顔なじみになってお話しします。市から期待されていたのは、施設が密室にならないよう「外の風」を入れる

役目をするのでした。残念ながらコロナ禍で施設に入れなくなり、今年の初めに横浜市では事業が打ち切

りとなりました。

## 現在の思い

私は毎週、救世軍の集会で聖書のメッセージを聞いて、力をいただいています。また、集会に集う方々から元気をもらい「一週間が

ぼうろ」という気持ちになることができています。

子育て世代の今のお母さん方で、もし孤独を感じている方がおられたら、「一人

で抱え込まないでください」とお伝えしたいです。相談できる場所につながってほしいと思います。中にはためらう方もいますが、大丈夫です。自分だけで抱

え込まないでほしいのです。

## 終わりに

自分にはわからなかったことが、少しずつわかり、道ができ、それが今まで続いている。そのことを振り返ると、自分の力ではとてもできないことだと感じます。神様の不思議な導きだと、今も考えています。

最後に、私の好きな聖書の言葉をご紹介します。

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があ

なたがたに望んでおられることです。」(テサロニケの信徒への手紙一 五章一六〜一八節)

この聖句が、いろんな時に心に浮かびます。

もうひとつは、詩編二三編です。これは、父と二人で何度も読み、また、参加している合唱団でもシェーベルトの「詩篇二十三篇」で歌っている愛唱歌です。

「主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ 憩いの水のほとりに伴い 魂を生き返らせてくださる。

主は御名にふさわしくわたしを正しい道に導かれる」(二〜三節)

と始まるこの詩編にあるように、この先何があってもいつも一緒にいてくださる神様と共に、すべてをおゆだねしながら歩んでいきたいと願っています。



地域で続いている子ども支援活動





## 世界をみつめて

### 〈日本〉全国大会の開催

日本の救世軍は2025年に創立130周年を迎え、11月に東京で全国大会を開催しました。国際本部より、南太平洋及び東アジア地域万国書記官のユサク及びウィディアワティ・タンパイ中將をゲストに迎えました。

11月22日（土）は中央区立日本橋公会堂で、「バンドレイジング・チャリティー・コンサート」を開催。救世軍ジャパン・スタッフ・バンドとThe Band of the Black Coltが共演し、特別ゲストのウィリアム・ハイムズ氏の指揮によるプラスバンドの豊かな響きに、会衆は聴き入りました。聖書のメッセージも語られました。

23日（日）は千代田区・日本教育会

館にて、大会聖別会（礼拝）をおこないました。兵士入隊式（救世軍の信徒〈兵士〉となる信仰告白の式）もおこなわれました。ユサク・タンパイ中將が聖書からメッセージをし、祈りの時がもたれました。同日午後は賛美集會が開かれ、カナン・プレイズ・チャーチの長沢崇史牧師をゲストに迎えました。賛美の歌を歌い、メッセージを聞き、祈り、恵みに満ちた時となりました。

各集會を通し、130年という節目を迎えて新たな一歩を踏み出すため、神の恵みと力を受ける時となりました。



11/23 大会聖別会



バンドレイジング・チャリティー・コンサート



11/23午後 賛美集會

### 〈香港〉きずな献金2024による支援

救世軍女性部では毎年10月に「きずな献金（海外支援のための献金）」を実施しており、3カ年プロジェクトとして、①計画、②実施、③報告の各プロセスを踏んでいます。2024年の香港プロジェクト（虐待などによるトラウマを抱えた子どもたちが暮らすグループホームの改装）のためには、総額1,144,109円が献げられました。これについて現地の救世軍から報告が届いています。

救世軍が香港・ピンティン地区で運営するグループホームでは、きずな献金を通しての支援により、大規模な環境改善をおこなうことができました。トラウマケアの観点によるデザインに基づいて家具や棚の改修が進められ、子どもたちにはすぐに良い影響が見られたとのこと。新しい住環境は「温かい家庭」となり、子どもたち



に安全で質の高い暮らしと、心の癒しを提供する場になっています。

←ひと息つけるスペースを設置し、気持ちを落ち着かせる場に



安心感につながる色使いやデザイン

## 救世軍とは？ What is the Salvation Army?



救世軍は、世界134の国で活動するプロテスタントのキリスト教会で、国際本部は英国ロンドンにあります。1865年、英国のメソジスト教会の牧師ウィリアム・ブースと妻カサリンによって始められ、東ロンドンのスラム街で困難な生活状況にある人々に助けの手を伸べつつ、神様の愛を伝えてきました。

日本では1895（明治28）年に英国から士官（伝道者）たちが来日して救世軍の働きが始まりました。昨年、130周年を迎え、131年目の歩みをスタートしています。日本人で最初に救世軍士官となった山室軍平は、平易な言葉で聖書のメッセージを伝え、小隊（教会にあたる）を拠点として伝道を進めるとともに、<sup>はいしやう</sup>廃娼運動や結核療養所の設立に、妻の機恵子と共に力を尽くしました。創立時代からの信仰のバトンが受け継がれ、現在、日本の救世軍では各地の小隊、病院、社会福祉施設（保育、児童養護、高齢者支援、女性自立支援、アルコール依存症者回復支援）を通して、神と人とを愛し仕える働きを進めています。



### ☆『キッズ・ゴスペル』コーナー☆ （子ども向け紙面）

左のQRコードから、今月の『キッズ・ゴスペル』を閲覧できます！ 聖書のお話も動画で見られます。ぜひ、ご覧ください！



### 救世軍公報 ときのこえ

発行日 福音版 / 毎月1日、広報版 / 奇数月15日  
定 価 福音版 / 1部40円、広報版 / 1部100円  
（税込）クリスマス特集号（12月1日号） / 1部100円  
振 替 00180-5-4400  
発行兼 救世軍  
印刷人 代表者 スティーブン・モーリス  
編集人 山谷 真  
発行所 救世軍本營 <https://www.salvationarmy.or.jp>  
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17  
電話 03-3237-0881（代表）  
Mail [jpn.editorial@jpn.salvationarmy.org](mailto:jpn.editorial@jpn.salvationarmy.org)  
印刷所 有限会社コーチ印刷



聖書は新共同訳を使用しています © 共同訳聖書実行委員会 © 日本聖書協会 救世軍は、旧統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、下記救世軍にご相談ください。

### 【取り扱い支部】

救世軍への連絡をご希望の方は、以下の中から該当する項目及び住所氏名をご記入の上、救世軍本營（左記）、もしくは、上記救世軍にご連絡ください。

- ・私の近くの救世軍を紹介してください。
- ・キリスト教についてもっと知りたいです。
- ・『ときのこえ』の購読を申し込みます。
- ・相談を希望します。